

「ジャンボ壁画」に携わった方々に話を聞きました

33 年ぶりに堤防の前を歩いてみたら、びっくりするくらい壁画がボロボロで。思い出フィルターできれいに見えてただけなんだなって思った。車で堤防の前を通る時にはピカピカのままだと見えてたんだけどね。

Instagramで堤防アートのことを知って、同級生たちに伝えたら、思い出エピソードがいっぱい出てきた。今でも自分が描いた絵はすぐ分かるし、当時のキレイな色のままの記憶がある。友達は、母親のスニーカーを履いて絵を描いた思い出を話してくれた。楽しく絵を描いたことだけでなく、それに付随するいろいろな思い出が残ってるよ。

当時壁画を描いた 鈴木智博さん



堤防に絵を描くって一生心に残るし、ペンキが褪せても思い出は色褪せないね。

子どもたちが描くなら、自画像。同時に蒲郡の特色も入れて、最終的に子どもたちを未来に導いてくれるような絵にしたかった。

教育長からジャンボ壁画の話をもらって、自分にできるのかなって毎晩悩んだだよ。でも、自分にとって良い挑戦の機会だと考えて、引き受けることにした。教育委員会の美術部会を中心に市内の美術の先生がたくさん動いてくれたよ。

長い堤防を1つの作品として成立させるのは難しかったけれど、熱海でプロの壁画を見たら、イメージが湧いたね。始まってからいろいろ課題があって、朝起きたら堤防に向かい、2,3 時間過ごす日々が続いたなあ。それでも、子どもたちに励まされ、ペンキ業者に助けてもらい、なんとか完成できた。その後、博物館で嘱託職員として働いたけれど、壁画を見ながら仕事ができ、あんな幸せはなかったね。

当時壁画をデザインした 鈴木守雄さん

